【博士学位請求論文概要書】

近世玉藻前説話の研究
―和漢比較文学の視点から―

馮　超鴻

本博士学位請求論文は、狐妖が変じた美婦・玉藻前（たまものまえ）を題材とした、一八〇五年（『画本玉藻譚』の出版年次・文化二年）までの近世期の文芸を対象として、和漢比較の角度から文学的考察を行うものである。その一連の考察を通して、近世期における玉藻前説話の形成と発展を系統的に解明するとともに、一つの切口として、近世文学と中国文学との交渉の様態を追究し、近世文学の史的展開を追跡することを研究目的とする。

玉藻前説話は中世に成立した室町時代物語「玉藻の草子」まで遡るが、近世に至って多様な変貌を成し遂げた。この変容の過程において、中国文学の影響を等閑視できない。本論文では、日本近世における玉藻前の形象を探求しつつ、中国文学との影響関係を重視して考察を試みた。

●序　章

序章において、玉藻前説話の発生の背景を考察した上で、玉藻前説話に関する先行研究の整理・検討、および本論文の問題提起と章節構造を提示した。玉藻前説話について考察する前提として、まずその発生の背景を明らかにする必要がある。日中両国の文学世界においては、ともに「狐変妖婦」という共通するモチーフが存在している。筆者は、近世以前の両国の狐変妖婦譚の歴史をたどりつつ、狐変妖婦の発想の源泉を追究し、両国において善良なる女狐がいる一方、害悪を与える狐婦も存在することを指摘した。長期にわたる交流を通して、中国文学に含まれる狐変妖婦の発想が伝来され、日本の狐譚の滋養となった。それは後にいっそう特色が付与され、日本独特の新たな狐変妖婦譚として再構築されてきた。本論文で扱う玉藻前も、このような土壌の上で芽生え、両国の文学の養分を吸収して成立したものだと考えた。

次に玉藻前説話の先行研究に注目した。従来の「玉藻の草子」への宗教的および歴史的な解釈を紹介した上で、近世期の玉藻前説話に対する研究が、特定の一、二作品にのみ注目し、玉藻前説話群の全体像を踏まえない局所的なものにとどまりがちで、中国文学の影響に注目する新たな究明がほぼ停頓している現状を指摘した。研究をより深めるために、本論文では日中両国の文学に目を向け、日本の個々の作品を発掘して研究の土台を作った上で、これら個々の作品を時系列に沿って縦軸に据えると同時に、同時代の他の文芸作品をも視野に入れつつ、横のベクトルを加えること

で、近世期の玉藻前説話群を俯瞰して系統的に考えることを研究の方針とした。

このような方針を以て、玉藻前説話が日本近世の時代に入って（一六〇三）、その隆盛期のシンボルとして聳える二つの読本『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の上梓（出版年次・一八〇五）の間、

・どのように発展し変化してきたのか

・この変化の過程において、いかに漢籍の影響を受けたのか

の二つの問題を解明すべく、考察を進めることを述べた。

最後に、本論文の章節の配置について説明した。中世の「玉藻の草子」に登場しない妲己が、近世に至って狐変妖婦の系譜に参入し、やがてその話譚がさらに敷衍されて作品の不可欠な一部となっている。よって、近世の各作品における妲己譚の様相に基づき、玉藻前説話の発展を「始動期」（一六〇三～一七六五）、「転換期」（一七六六～一八〇二）、「隆盛期」（一八〇三～一八〇五）の三期間に分け、それぞれを章に立て、各節において、各作品及びその相互関係について詳細に論じるとした。

●第一章　始動期の様相

第一節　明和以前の玉藻前説話

本節では、明和三年（一七六六）に刊行された『勧化白狐通』以前の玉藻前説話の特徴を洗い出した。明和以前の玉藻前説話は、基本的に「玉藻の草子」を踏襲し、玉藻前が三国を渡って「塚の神→褒姒→玉藻前」の順番で変転する、という狐変妖婦の系譜の枠を越えていない。この時期の作品は、主に玉藻前以外の要素に注目して話譚を膨らませることで、作品に新味を加える。暦数書『簠簋抄』、狂言『狐川今殺生石』、浄瑠璃『殺生石』、浄瑠璃『那須野狩人那須野猟師玉藻前曦袂』、および八文字屋の浮世草子などの作品を取り上げ、この時期の玉藻前説話を概観した上で、その特徴を探求した。

具体的に言えば、この時期の玉藻前説話に、三国伝来の玉藻前のイメージが定着しているが、『簠簋抄』のように三国の内容を拡張したものが存在しながら、本格的にそれを改編した作品の登場は、明和以降を待たねばならない。また、『那須野狩人那須野猟師玉藻前曦袂』の冒頭に妲己が記載されることから、近世以前に玉藻前と関連が薄かった狐変妲己が、玉藻前説話に浸透し始めたと推察した。狐変妲己の認識は、近世初

期の中国白話小説の伝来および流布とは無関係ではない。『新刊全相平話武王伐紂書』や『狐媚叢談』などの話題が江戸の文人の筆記に記録されていることが、その流通を裏付ける。特に、『春秋列国志』を翻訳した清地以立の『通俗武王軍談』の巻一～巻四に当たる「妲己譚」が、当時の玉藻前説話の大きな取材源の一つとなり、狐変妲己の流布に拍車を掛けたと考えた。

明和以前の玉藻前説話は、多く創作されていたとは言い難いが、『那須野狩人 那須野猟師 玉藻前曦袂』の冒頭部分に妲己の名が見られるように、中国文学の内容を汲み取りながら少しずつ玉藻前説話の成長が促されていく。このような変化が、やがて次の時期の狐譚と繋がるのであり、ここでは更なる変貌のために準備を整えている。

第二節　『通俗武王軍談』の翻訳――妲己譚を中心として

『通俗武王軍談』（清地以立訳・二十四巻・宝永二年〈一七〇五〉刊）は中国の講史小説を和読した書物である。近世の多くの玉藻前をテーマとする作品に利用され、玉藻前説話の発展に大きく貢献している。本節では、『通俗武王軍談』の妲己譚（巻一～巻四）を中心として、訳者・清地以立の翻訳に着眼して考察を行った。

従来の研究では、『通俗武王軍談』の翻訳底本が、明代中国小説『春秋列国志』の二系統のテキストの内の『新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝』だと目されてきた。しかし、本節の比較分析を通じて、もう一つの系統である『新刊京本春秋五霸七雄全像列国志伝』にのみ記された内容が、『通俗武王軍談』において反映されていることが明らかとなった。以立が翻訳するに当たり、『新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝』のみならず、『新刊京本春秋五霸七雄全像列国志伝』をも併用したと推測した。

また、先行研究では、以立が「原本をほとんど逐語訳」し、「原文に手を加えてさらに小説としての面白みを増そうという翻案意識は見られない」と言われている。本節の考察によると、以立が単純に底本に依拠した逐語訳ではなく、能動的に翻訳作業を行ったことが分かった。以立は『新刊京本春秋五霸七雄全像列国志伝』を参考にして、『新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝』の誤字と判断される内容を正しく訳したり、場面に応じて底本の内容を改編したり、底本に記載されない内容を添加したりして、翻訳に苦心している。これは以立の謹厳な翻訳態度を示す一方、その作意の一端をも表わしていると考察した。

●第二章　転換期の様相

第一節　『勧化白狐通』の位置：継承と発展

「転換期」の玉藻前説話は、第一段階「始動期」に現れた萌芽を育み、「玉藻の草子」の天竺・唐土・日本の三国伝来の発想を継承しつつ、狐変妖婦の系譜に妲己を加えて新たな発展を見せる。この時期の『勧化白狐通』（僧単潮海誉著・三巻・明和三年〈一七六六〉刊）が、いわゆる承前啓後の重要な役割を果たしている。しかし、『勧化白狐通』本体に対する専論はいまだ見当たらず、『勧化白狐通』が如何に従来の玉藻前説話を継承発展したかも不詳のままである。本節ではその継承の具体的な様相を明らかにしつつ、独自の発展について考察した。

陰陽師安倍泰成の奏聞によって、天竺の話譚が挿入されるように、『勧化白狐通』の著者・海誉が「玉藻の草子」の内容と構造を継承する一方、天竺部分を大幅に増幅させ、三国物を試みる意欲を示している。

また、海誉は『通俗武王軍談』や中国小説集『狐媚叢談』を援用し、玉藻前と安倍泰成との論争、および術比べの内容を添加し、「玉藻の草子」に登場する人物に新たなイメージを付与する。それのみならず、『仏説仁王般若波羅蜜経』、『仁王護国般若波羅蜜多経』、『賢愚経』などの仏典に加え、『簠簋抄』を利用し、斑足王と普明王との内容に新味を編み出す。さらに、『通俗武王軍談』の妲己と姜皇后をモデルとして花陽夫人と采姫を創作し、『簠簋抄』の釈迦が酔象を調伏する記載に触発され、花陽夫人が人を獅子に食わせる内容を案出したと推測した。

近世の玉藻前説話の発展を考察する上で、『勧化白狐通』に現れた狐変妖婦の系譜が重要な意味を持つ。「玉藻の草子」では狐妖が「塚の神→褒姒→玉藻前」の順番で変転するが、『勧化白狐通』ではこれを踏まえつつ妹喜と妲己を加え、褒姒・花陽夫人・玉藻前と連綴させ、「妹喜→妲己→花陽夫人→褒姒→玉藻前」の新たな系譜を創出した。『勧化白狐通』では妲己の話譚が語られないが、狐変妖婦の系譜に、妲己を加えて玉藻前と花陽夫人と連綴させるという発想が、後の『三国悪狐伝』に踏襲されてさらに発展し、やがて『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』を経て定着する。

第二節　『三国悪狐伝』の伝本について

先行の玉藻前説話を吸収して更なる進展をもたらしたのが『三国悪狐伝』（著者不明・寛政九年〈一七九七〉以前の成立か・『悪狐三国伝』と題する伝本も存在する）である。本節では『三国悪狐伝』の二十六本の伝本を調査し、系統に分けた上で、『三国悪狐伝』の祖本について推測した。

『三国悪狐伝』は実録的写本であるため、成立年次と作者が定かではない。先学によって「寛政九年（一七九七）」、「山野辺周卜撰之」の記載を持つ写本が発見されたことから、「寛政九年」が一つの成立の目安となると考えられる。しかし、度重なる書写の過程で、今日に伝わる伝本が必ずしも祖本本来の姿を保っているわけではない。本節では二十六本の伝本を考察し、「内容の相違」、「標題の位置」、「表現の相違」、「注記の多寡」の観点から、伝本を甲・乙・丙の三系統に分類した。

さらに、甲系統にのみ記される第十条の注記と、乙系統の第十七条の注記に着眼した。第十条の注記では、耆婆が持つ「薬王樹」をこの書で「野狐樹」に改める理由を述べている。創作意図を自ら注釈し、野狐樹に改めた所以を説明していることから、この一条は『三国悪狐伝』の著者が施した注記である可能性が高い。また、第十七条の注記では、書写者が付け加えたと判断される内容が含まれているため、乙系統は甲系統に基づいて、増補添加したものと考えられる。比較分析を通じて、甲系統が乙系統より祖本に近い形態を保持しているのではないかと推測した。

第三節　『三国悪狐伝』と近世の狐譚

本節では『三国悪狐伝』の内容に目を向け、著者が如何に先行する狐譚を利用しつつ、改編を行ったかについて考察した。『三国悪狐伝』では、「玉藻の草子」の三国伝来のイメージを摂取するとともに、妲己譚を巻首に据え、狐妖を「妲己→花陽夫人→褒姒→玉藻前」の順番で変転させる。「玉藻の草子」に登場しない狐変妲己を玉藻前と連綴させるのが、従来の玉藻前説話では見出せない、画期的な変化である。と同時に、話譚の舞台を三国に拡大し、各国の話譚は独立した話題として綴られている。これが従来の「玉藻の草子」の安倍泰成の奏聞によって、天竺の話譚が挿入される構造とは根本的に異なっている。

従来の狐変妖婦譚なくして、『三国悪狐伝』の成立は望めない。先学の指摘により、『三国悪狐伝』が『通俗武王軍談』や『勧化白狐通』、『安倍仲麿入唐記』の影響を受けていることは明らかであるが、本節では今までとりたてて注目されていない『通俗呉越軍談』、『安倍晴明物語』、近世に刊本として刊行された「玉藻の草子」などの近世の狐譚の利用について考察した。『三国悪狐伝』の著者は単に先行する狐譚を焼き直したわけではなく、作中に様々な加工を施した。本節では、これらの著者による加工にも注目した。

具体的には、『三国悪狐伝』の著者が『通俗呉越軍談』における伍子胥の詩歌を巻首に据え、人間界を征服しようとする狐妖の魔性を際立たせる一方、『通俗武王軍談』を吸収しつつ、太公望が我鬼先生より照魔鏡を戴く内容に改編し、照魔鏡を手に入れる経緯を補説する。また、当時の人々が抱いた狐と菊とのイメージに配慮し、狐妖の身を隠す場所として、『通俗武王軍談』の「牡丹の叢」を「菊の畑」に変える。

『三国悪狐伝』では泰近の「足止めの法術」が『勧化白狐通』より発展した形で記述され、『勧化白狐通』の影響が看取される一方、身より光を放つ点や、泰近に命じられて玉藻前が幣取りをする点など、「玉藻の草子」を吸収した内容も見出せる。さらに、長谷寺観音の表現や、野馬台詩の全文、冒頭部分の天地開闢および「悪鬼神」・「八将軍」・「金神」・「鬼門」など、『安倍仲麿入唐記』に記述されない内容は、『安倍晴明物語』を利用した痕跡だと考えた。

●第三章　隆盛期の様相

第一節　『絵本三国妖婦伝』の「修飾」をめぐって

読本『絵本三国妖婦伝』（高井蘭山著・上中下三篇各五巻・享和三年〈一八〇三〉～文化二年〈一八〇五〉刊）は、文化初頭の狐妖ブームの火付け役として注目に値し、近世の狐譚の系譜において重要な位置を占めている。先学の研究によって、著者・蘭山が『三国悪狐伝』を種本とし、『通俗武王軍談』に依拠して創作したことが指摘される。本節では、蘭山による「修飾」、すなわち加工添削に着眼して作品の内面を掘り下げた。

蘭山はおおむね上記の二書に依拠し、施した加工のほとんどが措辞の潤色にあるが、玉藻前の形象の改変のような改編添加も見せている。本作における玉藻前は、

『三国悪狐伝』と異なり、王威に服従し、陰陽師・安倍泰親の法術に対抗できない無力な形象を持つ。このような改変を行う理由として、二点を挙げた。一つには、蘭山が「神国」の言葉を多用し、作中に神国日本のイメージを盛り込む。神国において狐妖はあくまでも下位の存在であり、この国の人民に抵抗できず、現人神である天皇の命令に従わざるを得ないからである。二つには、蘭山の序文の「妖不克徳」の表現のように、妖魅が常に徳を持つ人に勝り得ないからである。

また、蘭山は作品に登場した人物に、「仁・忠・孝」のような儒教的道徳を新たに付与すると同時に、「戒色」の教訓性を作中に溶け込ませる。さらに、『三国悪狐伝』の狐変褒姒を、『通俗武王軍談』の龍の精の化身である褒姒と融和させるなど、依拠する『三国悪狐伝』と『通俗武王軍談』の内容を融合し、二書における褒姒に関する齟齬を無くし、作品の合理化に努める。最後に、蘭山は『三国悪狐伝』に記される漢詩に触発され、漢詩の内容を改変したり、自ら新たな漢詩を巻首に飾ったりして、漢文の能力を駆使して潤色を施す。これらの「修飾」から、蘭山の儒教的立場や、教訓性を重んじる一面が窺われると指摘した。

第二節　『画本玉藻譚』生成考――狐変妖婦説話との関わりを中心に

本節では、文化二年（一八〇五）に上方で刊行された読本『画本玉藻譚』（岡田玉山画、五巻）に注目し、主に先行する狐変妖婦譚との受容関係、および『画本玉藻譚』の著者が施した加工について考察した。

『画本玉藻譚』において、九尾の狐が唐土では妲己に化して紂王を惑わし（妲己譚）、また天竺に渡り花陽夫人と変じて斑足王を誘惑し（花陽夫人譚）、さらに本朝に逃げ込み玉藻前と化けて鳥羽院を魅了し（玉藻前譚）、最後に退治される。『画本玉藻譚』の著者は原拠となる書物からそのまま依拠するのではなく、独創的な加工をも施す。

具体的に言うと、「妲己譚」において、著者はほぼ逐語的に『通俗武王軍談』に依拠すると同時に、費仲などの人物を簡略化し、話譚を妲己に集中させる。また、「花陽夫人譚」では、『勧化白狐通』を利用しながら、『通俗武王軍談』に登場する紂王の像を斑足王に投影する。さらに、「玉藻の草子」の記述から、源頼政の「鵺退治」を「玉藻前譚」に盛り込む発想を得たように、『画本玉藻譚』の著者は既存の狐変妖婦説話の中にヒントを見出し、これらを話譚の中に融合させ、物語としてより豊かな

内容に発展させる。

先行研究では、『画本玉藻譚』と『三国悪狐伝』と関係性が必ずしも鮮明でないため、本節では二書の関係の解明を試みた。「玉藻前譚」において、玄翁の説法を受け、玉藻前が自らおのれの誕生を物語る。「天地の開けざる時」に誕生する内容や、「人をして魔界に入」らしめんとする記述が、『三国悪狐伝』の狐妖が「天地開闢」の際に生まれ、本朝を「魔国」にせんとする内容と類似する。これは『画本玉藻譚』の著者が『三国悪狐伝』の影響を受けた点と考えた。また、狐変妲己の話譚を巻首に据え、妲己を花陽夫人・玉藻前と連綴させる『画本玉藻譚』の構造も、『三国悪狐伝』から学んだものだと推測した。最後に、作品に妙味をもたらすため、『画本玉藻譚』の著者が中世以来受け継がれてきた狐変褒姒を敢えて用いなかったと推察した。

第三節　『画本玉藻譚』生成続考――三国物を為す手法に着眼して

前節では主に狐変妖婦説話を縦軸に、『画本玉藻譚』の著者が如何に従来の狐譚を利用して形成したかに主眼を置いたが、本節ではそれを踏まえつつ、狐譚以外の作品をも視野に入れて横の側面から照射し、『画本玉藻譚』の著者が如何なる手法を以て、三国物としての物語を仕上げたかについて考察を試みた。

『画本玉藻譚』の著者は三国の序文を、それぞれ漢文・梵語・和文で書き、国の風趣を表わす挿絵を文中に配置し、意図的に三国の個性を打ち出す。それのみならず、話譚の舞台に合わせて多様な資料を使用し、互いに雰囲気が異なる物語を作り上げる。

具体的に言うと、「妲己譚」において大いに『通俗武王軍談』に依拠しながらも、漢詩を残して漢土の趣を保持する一方、炮烙や蠱盆などの非道の行いに取材し、妲己の残酷無道なイメージを作り出す。「花陽夫人譚」に関しては、普明王の口を借りて仏国の性格を言い表しつつ、仏の光によって剣が寸断されることや、狐が体内に入る夢を見るなど、仏典由来の内容を多用することで、仏国の性格を与える。また、仏法を恨む花陽夫人を描き、信者を虐殺する一連の内容を配置し、仏法と不倶戴天の花陽の像を作り上げる。最後に、弥陀三尊の仏光による花陽退治に発展させ、仏国の性格を強調する。唐土・天竺と異なり、本朝の「玉藻前譚」は怪異の色調に包まれている。この怪異を案出するため、著者は当時の俗習を参考にして、藻を被る狐の変

身術を融合させる。また、三十三間堂創建説話を盛り込み、蓮華坊の髑髏の存在を的中させ、玉藻前の尋常ならざる妖異さを強調する。話の終盤になると、石屋の失敗譚を『黒塚』と融和させ、黒仏や女性の怪物に出会う話を織り込み、怪異さを巧みに演出している。狐の変身術、蓮華坊の髑髏、黒塚の伝説は、民衆によく知られているもので、それを用いて本朝という舞台にリアリティーを注ぎ込み、唐土や天竺と区別する。『画本玉藻譚』の著者が、三国に各自の性格を付与することで、三国物としてのこの作品に妙味を加えると考察した。

第四節　玉藻前と照魔鏡――『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』における「狐妖退治」の形成をめぐって

『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の二つの読本は、ともに類似する内容を持ち、いわゆる三国伝来の狐変妖婦譚を物語っている。本節では、その唐土と本朝部分に登場する照魔鏡に着目した。

二書の本朝部分において、照魔鏡による「狐妖退治」の話型が認められ、二書がともに類似する話型を有するのは、偶然とは思えない。その原型はどこにあるのか。また、玉藻前の説話は、「玉藻の草子」や謡曲「殺生石」を源泉とするが、その中に照魔鏡は現れない。照魔鏡はどのように二書に取り入れられたのか。本節ではこの二つの疑問の解明に努めるべく、「狐妖退治」の話型の形成について総合的な比較考察を試みた。

まず、『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の形成に関する指摘を踏まえ、二書の形成と関わる『三国悪狐伝』、『勧化白狐通』、『通俗武王軍談』の三つの書物を紹介した上で、(『通俗武王軍談』は玉藻前の説話を持たないため)『三国悪狐伝』と『勧化白狐通』から考察し、『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』における「狐妖退治」の話型が、『勧化白狐通』を祖型とし、『三国悪狐伝』を経由したものだと推察した。

また、第二章第一節で指摘した、『勧化白狐通』が積極的に『通俗武王軍談』を利用した事実を踏まえ、『勧化白狐通』における照魔鏡が、『通俗武王軍談』の影響を受けた結果だと指摘した。唐土部分に現れる照魔鏡に関しては、『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』は、『通俗武王軍談』をほぼそのまま襲用すると同時に、唐土部分に登場する照魔鏡の影響を受け、それを本朝部分に援用改編したと考察した。

さらに、中国白話小説に登場する照魔鏡にも言及した。『新刊全相平話武王伐紂書』や『狐媚叢談』、『封神演義』や『西遊記』などの中国小説が日本に伝来し、その流通流行とも相まって、照魔鏡の霊力が認識され、それを斬新な内容として受容したと指摘した。玉藻前と照魔鏡との連結について、寛延四年（一七五一）の浄瑠璃『那須野狩人那須野猟師玉藻前曦袂』に現れる、還魂した人を本来の姿である屍に戻した神鏡が、玉藻前と絡み始めた照魔鏡として注目に値する。一方、草双紙『殺生石水晶物語』や『殺生石』に登場する照魔鏡のように、明和・安永期から、照魔鏡は本性を暴く道具として、玉藻前と密接に関連していることを推測した。最後に、中国文学に目を向け、『別国洞冥記』や『抱朴子』に載る記述を採り上げ、照魔鏡の源泉を探求した。

第五節　『絵本三国妖婦伝』における耆婆と移狐樹をめぐって――中国小説との関わりから

狐妖を退治する道具として、『絵本三国妖婦伝』では「移狐樹」という不可思議な霊木も用いられる。本節では、この「移狐樹」の趣向の形成をめぐって考察を行った。内容の共通性を根拠として、この一書の、霊木を以て狐妖の正体を暴く内容は、『三国悪狐伝』（この作品では霊木の名称は「野狐樹」）を経て『勧化白狐通』（この作品では「薬王樹」）に遡ると指摘した。

第二章第一節の考察を通して、『勧化白狐通』の著者・海誉が積極的に『狐媚叢談』を利用したことが明らかとなった。この事実を踏まえ、『絵本三国妖婦伝』に見られる霊木による狐妖退治の趣向の形成を、中国小説集『狐媚叢談』と結び付けて考えた。『狐媚叢談』には「華表照狐」の一話が収録されている。この一話において千年の木を以て狐妖の正体を暴露する。正に霊木による狐妖退治の発想が存在している。その一方、仏典においては、耆婆は薬王樹を以て病気を癒す名医として描かれている。海誉は仏典における耆婆と薬王樹との繋がりを利用し、『狐媚叢談』の「華表照狐」の一話の霊木による狐妖退治の発想と融合させ、薬王樹を以て狐妖を退治する内容を創作したのではないかと推論した。

また、『絵本三国妖婦伝』においては、狐妖が変じた花陽夫人の脈を診断し、耆婆がその正体を知る内容が物語られている。同様に、その祖型は『勧化白狐通』に求められる。『狐媚叢談』の「西山狐」の一話では、これと類似する内容が記載されてい

る。すなわち、医者范益が娘に変じた狐妖の脈を診察し、その正体を知る。海誉は「西山狐」の一話の「狐妖の脈を診る」趣向を吸収し、作中に盛り込んだのではないかと推測した。

第六節　玉藻前と同形二人――『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』から出発して

『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』においては、狐妖が人間の姿に化して人の前に現れ、本物の人間と同じ姿で同時に登場し、いずれが本物か識別できない、いわゆる同形二人の内容が物語られる。本節では、この同形二人の趣向に注目し、その生成について考察した。

二つの読本に記述される同形二人の内容は、『三国悪狐伝』を経由して『勧化白狐通』に祖型を求められる。内容の類似性から、『勧化白狐通』の著者・海誉が『今昔物語集』巻二十七第三十九話より、同形二人の内容を吸収して創作したと推測した。

『勧化白狐通』の成立以前に、『泉州信田白狐伝』（誓誉撰・五巻・宝暦七年〈一七五七〉刊）や『芦屋道満大内鑑』（竹田出雲作・享保十九年〈一七三四〉大阪竹本座上演）、浄瑠璃『殺生石』（紀海音作・享保初年頃作と推測）など、近世の狐譚では既に狐妖が同じ姿の人に変じる内容が描かれている。また、演劇の分野でも、享保初期前後の近松門左衛門の浄瑠璃『双生隅田川』や『弘徽殿鵜羽産家』などのように、作品では同形の人間に化する「双面」の趣向が見出せる。さらに、浄瑠璃『赤染衛門栄花物語』（近松門左衛門作と擬せられ、延宝八年〈一六八〇〉に宇治加賀掾によって京都で初演されたという）も「双面」の趣向を用いた作品である。「双面」の趣向が当時の人々にかなり受け入れられていたと言えよう。海誉はおそらくこれらに刺激され、同形二人を作中に織り込んだと考えた。

中国の古典作品に目を向ければ、唐代に成った『朝野僉載』には、狐妖が同形の人間に変身する話譚が記載されており、唐代伝奇『離魂記』にも、人の魂が肉体から抜け出して人間のように生活する、いわゆる「離魂」と称される特殊な同形二人が記されている。これらの漢籍の日本伝来、そしてその中に含まれる同じ姿の人間に化する発想が、狐妖が同形の人間に変ずる内容の形成に影響を与えたと指摘した。

●終　章

終章では、近世における玉藻前説話を総括した上で、「玉藻の草子」に記述しない妲己の話譚が、近世の作品に浸透して不可欠な一部分となったことは、端的に中国文学から受けた影響を表わしていることを改めて指摘した。

また、本論文では時系列に据えた玉藻前説話作品群を研究対象とするため、このような研究を通して、近世文学史の発展の具体的な様相を窺い知れると考えた。かつて中村幸彦と徳田武が、読本の発生に、仏教長編説話、実録の風体の小説、通俗軍談が関与していると指摘した。玉藻前説話の発展の過程においては、正に両氏が指摘したように、読本の生成に、長編勧化本、実録的写本、通俗軍談が大きく関与し、必要にして不可欠な役割を果たしている。一方、本論文の考察により、この三つの分野の作品が単に読本の発生に関与しているのみならず、互いに影響し合っていることも明瞭となったことを述べた。最後に、今後に残されている課題に目を向け、その研究の方向について展望した。

引用文献一覧

参考文献

初出一覧